

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アレクサンダー大帝の海底旅行
Sub Title	Le Voyage sous-marin d'Alexandre
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.130- 148
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0130">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0130</a>

## アレクサンダー大帝の海底旅行

松原秀一

中世フランス文学で模範とされる王はマケドニア王アレクサンドロス大帝、シャルルマーニュ大帝（カルル大帝）とアーサー王（アルテュール王）の三大王である。史実上の人物としてアーサー王は最も事績に乏しいが文学上では膨大な伝説群を産み出し、特に『聖杯』を求めて冒険を重ねる『円卓の騎士』の物語として中世の全欧に拡がったばかりか、十九世紀のロマン派にも好んで取り上げられワグナーの楽劇に収斂し、二十世紀には映画にまで進出している。九世紀の西ヨーロッパで西ローマ帝国帝王となりカロリング・ルネサンスを斉らしたシャルルマーニュ大帝は特に武勳詩の世界での英雄になっている。十九世紀にはヴィニニー、ユゴーも詩の題材とし、劇にも取り上げられているが、アーサー王文学程の影響力を再び持つことは無かった。マケドニアに王子として生まれ十三歳の時から三年間アリストテレスの薫陶をうけ、ベルシャを制覇しインドまで遠征して東西文明交流の道を拓いてヘレニスム時代をもたらした史上の大英雄アレクサンドロス大王は起元前三百二十三年にバビロンで三十二歳でという若さで生を終えた。彼の華々しい生涯は早くから伝説化され出生もゼウスの子とされたり、エジプト王ネクタネボスの子とされたり、死亡も毒殺に依るとされたり諸説が作られていくが文学上でも地上の制覇に留まったアーサー王やシャルルマーニュ大帝の二王に勝る王として実際に行なったインド遠征の他、空中旅行、海底旅行から天国旅行まで仮託されている。

中世フランスで『アレクサンドロス物語』に用いられた十二音綴の詩行が今でもアレクサンドランと呼ばれることから分かる様に『アレクサンドロス物語』は中世末期まで非常に好まれ、特にインドの驚異を幻想的に書いた部分や、頭が無く腹に目のある人間、一本脚の人間に出会ったり途中で人間の目のある何よりも重い石に出会う天国への旅など現代の我々が『スターウォーズ』などの宇宙物の映画を楽しむ様に好まれたらしく多くの写本も残されているのに、実際の東洋が知られ、新大陸が発見されて地上に幻想が無くなると共に、文学の領域ではルネサンス以後取り上げられるところは少なく歴史の領域に戻っていつて仕舞っている。

それでも籠の四隅に鷲を結び空を自在に飛行してアレクサンドロス大帝の挿話は日本でも子供向きの物語として何度か語られて親しまれている様である。これも飛行が現実の物となってしまうのは、お伽噺として余喘を保つのがせいぜいなのかもしれない。この飛行法については日本に天正年間に伝わったイソップ物語としてもっとも古い『いそぼのふあぶらす』にもイソップの話として語られているので、ついでに触れて置こう。この説話は『イソップ寓話』のギリシヤ語・フランス語の対訳本を出したシャンブリによれば東方説話であり『アヒカル物語』として知られる話を取り入れたものだと云う。

天正年間にイエズス会師によって齊らされ日本人にも永く愛好されることとなるイソップ寓話はイソップの略伝から始まっている。この『略伝』は史実的根拠はなくロイブ古典叢書にバブリウスとファエドルスの『寓話』を刊行したイソップ学者ベン・エドウィン・ペリーの同対訳本の序論によるとギリシヤ語によるこのイソップ伝の最古のものは紀元一世紀のエジプトで書かれたものであるらしい。

ローマ字によるこの天正時代のイソップ寓話『いそぼのファブラス』の冒頭のイソップ伝ではエジプト王ネテナボが

イソップが死んだという虚報を信じてイソップが仕えていたバビロニアのリセロと言う名の帝王に難問を仕掛けてきたとする。空中に宮殿を立てるので人夫を一人送れというのである。イソップの養子エンノが罪を犯し、聡明なイソップが真相を知り明かすことをおそれて、企んでイソップを讒言し、これを信じたネテナボ王がイソップを殺せと臣下のエルミッポに命じたのであるが、エルミッポはイソップの才を惜しんで棺にいられて生かしておいたのであった。ネテナボ王がバビロニア王の難問に困り、イソップさえ居て呉ればと嘆くのを聴いたエルミッポは『いかに君、かのエソポを成敗いたせと宣旨を下された時、あまり本意なさに、ある棺に入れおいてござれば、まだ存命つかまつることもあらうずる』と答えると『帝王おおきに感じよろこばせられて、エルミッポに取りつかせられ』(……)『よろこびのなみだを流されて「いそぎエソポを召しよせい」と仰せられるによって、エソポふたたび死せいで蘇生つかまつり、参内いたすは不思議じゃ』ということになる。姿を改めて伺候したイソップは難問を聞くと『ギリホという大きな鳥を四つ生けどつて、かの鳥の足に籠をゆいつけ、その籠にわらべを入れおき、鳥の餌をもたせ、さし上げれば鳥も上にあがり、さげば鳥もまた下がる様に習はせて、かの四つの鳥の上にその造営をいたさうずる』と奏上して準備させ『エチット』に赴いた。エジプトの人々は醜く、やせ衰えたイソップの姿を『笑ひあざげることとは限りがなかつたけれども、エソポはこれをもともせず、内裏にまいって、国王を礼拝してかしこまった』のをみて国王は『さて高樓の作者はなんと』とイソップに尋ねた。イソップは

『おのおの召し具してござる。いづれの所にこんりつ(建立)つかまつらうぞ』と奏すれば、所を差いて教へさせらざたところで、国土の貴賤上下見物せうと出立つこと限りもなうてあまっさえ帝王・后までも軍を立てならべて、ここを先途と見物させられたに、エソポは、かねてたくんだことなれば、くだんのギリホを四ところに置いた。その

時、帝王「作者はたれぞ」と問わせらるれば、籠のうちなわらんべ（童）が参つて、一方の手には鳥の餌をもち、ま一方にはこてを取つて、かの鳥の餌をさしあげたれば、かの鳥はるかに飛び上がった時、わらべ「いづくの程にか御造営をばあらうぞ」といえば「その辺に建てい」と仰せらるれば、童こたへて申すには「しからば石と土とを運ばせられい」と云えば、上一人よりしも万民へんじにつまつて物云うものもなかつたによつて、エソポが才智の程を大きにはめられ、帝王も臣下も、そのほかしたじたの者どもも「このひとを師とせずは誰びとを師にせうぞ」と感じ合はれたと申す』

ここでギリホと言われているのはグリフォンと言われる身体はライオンで頭と羽は鷲の想像上の怪鳥であり、中世の『アレクサンドロス大王物語』でも空にアレクサンドロスを運ぶのはグリフォンなのである。

『伊曾保物語』を日本に斉らしたのはイエズス会師であつたがこの物語はギリシャの古典であつてキリスト教文学ではないので、ギリシタン禁制以後も禁じられることなく行われ古活字本もあり、万治年間（一六五八〜一六六一）の絵入り版には古活字本と同じ本文によるこの場面に挿絵がある。

ギリシタン版ではアレクサンドロスの空中飛行の籠の様に籠の四隅に付けられていたらしいギリホが古活字本では四羽のギリホに一つ一つ籠が付けられ子供が四人空に上がることになっている。古活字本ではイソップの養子エンノはエウヌス、バビロニア王リセロはリクウルス、イソップの命を助けておいたエルミッポはエリミホという名になっている。天草版では空中楼阁の難問を解いた後に『エソポやうじ（養子）に教訓の条々』が続き、その後には『ネテナポ帝王エソポに御不審の条々』と謎解きの数々が続くが、古活字版以下ではイソップが死んで居ないことが分かつて養子が死罪になるところをイソップが命乞いをして助かる話が加わつて上巻の終わりとなり、続く中巻の初めが『第一 伊曾保

子息に異見の条々』と個条書きの箴言集が続いて、次いで空中樓閣の難問の解決となる。古活字本に依って原文を引用しよう。

## 第二 エジツトの帝王より不審返答の事

去程に、イソポ彼計略に巧みけるは、ギリホと云大成鳥を四つ生きながら取て、其足に籠を結び付、その中に童子一人づつ入置、其鳥の衣食を持たせ、餌食をあぐる時は飛び上り、さぐる時は飛び下る様にして、以上四つこしらへたり。是を試むるに、恙なし。此由を奏聞すれば、御門大きに御感有。「さらば」とてエジツトに至ぬ。エジツトの人々、イソポが姿のおかしげ成を見て、笑あざける事限なし。され共、イソポ少もはばかる気色もなく、庭上にかすこまる。国王此由叡覽あつて、「バビラウニヤの御使は御辺にて待るか。虚空に殿閣立べきとの不審はいかに」との給へば「承候」とて、我屋に帰ぬ。

されば、此事風聞して、都鄙なんきやう（遠境？）の者共是を見んとて都に上りぬ。其日に臨んで、かのギリホをこしらへ、庭上にすへ、「所はいづくぞ」と申ければ「あの辺こそよかんめれ」と仰ければ、其辺にさしはなす。四の鳥四所にたちてひらめきける処に、籠の中より童の声として呼ばはりけるは、「此所に殿閣を建てん事やすし。早く土と石を運び上給え」とのしりければ、御門を初奉り、月卿雲客、女房に至まで、「実理なる返答かな」とあきれはててぞおはしける。御門此由叡覽有て、「いとかしこき計略かな」とて、イソポを尊み給ふ。「今日よりして我師たるべし」と定め玉ひけるとぞ。

日本に伝わったイソップの伝承がこうして少しづつ細部が変わっていくのも面白いし、アレクサンドロス伝説で魔法



万治版「伊曾保物語」



Q Dat as  
 die steu  
 confit l  
 ambria et seo gen  
 eut sa cite paise q  
 abatur: il se parti  
 sisse a tout son ost  
 alla sur la rouge n  
 a illec se rogerent e  
 y auoit Ding mo  
 haul et si grant e  
 sembloit quil sura  
 tast ses nues. dont  
 pandre monta sul  
 mont. Adonc il pe  
 en son cuer quil se  
 faire Ding engro y  
 quoy les oyeant  
 mes grifz se posterent iusques au cief: Douce quil Vouloir  
 noir et Droit quelles chose a auoit au ciel amdt. q de quelle soi  
 estoit la terre. Lors descendit de sa montaigne et comman

1506年、仏語散文「アレクサンドロス物語」

「ミシェル・ルノワール版 1506」

を使ってアレクサンドロスの母オリュンピアスと通じたとされるエジプト王ネクタネボスの名がエジプト王ネタナボとして出てくるのも興味を惹くが、空中飛行の説話が『アヒカール物語』でシリア語、アラビア語、アルメニア語などの説話としても語られ、シャンブリの言うように東方逸話としてイソップ寓話集に流れ込んだとすると、アレクサンドロス伝の空中説話もアレクサンドロスに仮託された東方説話である可能性も高い。『アヒカール物語』には英訳も有り、その仏訳も有る様だが (*The Story of Antikar, from Syriac, Arabic, Armenian, Greek and Slavonic versions*, London, Clay 1898, by Rendel Harris, Conybeare and Mrs. Agnes Smith Lewis, Translation française par Nau, 1909, Paris, Letouzey) どちらも入手出来ず、これ以上論じる材料が無い。従って本稿では、決して充分資料が

手許にあるわけでもないのだが、中世フランス文学に現れたアレクサンドロス大帝の『海中旅行』を取り上げてみたい。

アレクサンドロス大帝の伝記にはキントゥス・クルティウス、ユースティニウスのもの或いはオロシウスによるものなど多くあるが中世の多くの『アレクサンドロス大王伝』の粉本となったものは史実に多かれ少なかれ従おうとしたこれらの歴史書ではなく、巷説を多く交えたギリシャの伝承である。現存する最古のギリシャ語写本はパリ国立図書館蔵の十一世紀の写本であるが、十六世紀にアンリ四世の司書でもあった碩学イザーク・カゾーボン Isaac Casaubon が見た写本に著者として紀元前四世紀のギリシャの歴史家オリンテュスのカリステーネーの名が挙げてあったところから一般に『偽カリステーネー』によるアレクサンドロス大帝伝』という名で知られている。カゾーボンは新教の牧師の子としてジュネーヴで一五五九年に生まれ若い頃から学殖をもって知られ、当時の人文学者としても印刷家としても著名であったアンリ・エティエンヌの娘と結婚した。一五八二年にはジュネーヴでギリシャ語教授となり一五九六年にはモンブリエで、一五九八年にはパリでギリシャ語を教授してアンリ四世の図書室を任せられたがジェームス一世のフランス大使ウォットンと共にイギリスに渡り、ロンドンで一六一四年に没するまでフランスにもスイスにも戻ることは無かった。古典の刊行と注釈を多く残し、書簡も珍重された大古典学者であった。『偽カリステーネー』とよばれるこのアレクサンドロス大帝伝は紀元前二世紀頃のアレクサンドリア出身の作家の書いたものだろうと推定されている。ギリシャ語による最古の現存写本は前述の十一世紀のものだが、五世紀のアルメニア語訳があり、古形を伝えている。紀元四世紀の初めのユリウス・ウァレリウスのラテン語に依る『マケドニア王アレクサンドロスの事績』 *Res Gestae Alexandri Macedonis* も『偽カリステーネー』に基づくもので中世に広く読まれた。カリステーネーはアリステテレスの

甥であり記録者としてアレクサンドロス大帝の遠征に随行したことが知られている。後にアレクサンドロスと立場を異にしたため、陰謀に加担したと誹謗され処刑されたという。

中世に実見者の記録と言われるものの方に信憑性が置かれたのは『トロイ物語』がホメロスに依るよりも紀元二世紀のクレタ島出身で従軍したと信じられたディクティス *Dyctis Cretenensis* の『戦争日記』 *Ephemeris Belli* やフリギア人ダレス *Dares Phrygius* 『トロイ陥落史』 *Historia de Excidio Troiae* に依ったのにも『ロランの歌』の伝承における『テュルバン年代記』の位置などにも見られることである。

『偽カリステーネー』伝『アレクサンドロス大帝伝』は九五〇年頃コンスタンティノーブルに赴いたナポリの大司教レオによって西欧に持ち帰られ、レオはこれをラテン訳した。アレクサンドロス大王の伝記研究の権威マグーン *F. P. Magoun: The Gest of King Alexander of Macedon*, Harvard U. P. 1929) によると原題はおそらく『アレクサンドロス大王の出生と武勳』 (*Natuitas et Victoria Alexandri Magni*) であつたらうと言うが、この書が十五世紀末に印刷本となった時の題名から一般には『戦史』“*Historia de Praxius*” と呼ばれている。

古型を保つという偽カリステーネーのアルメニア語による『世界の制覇者マケドニアのアレクサンドロス物語』はニューヨーク州立大の *Albert Muegrich Wolohojian* 助教授による英訳が一九六九年にコロンビア大学プレスから出版された。これにはアレクサンドロスの空中旅行も海中旅行も出て来ず、天国旅行も勿論出てこない。アレクサンドロスはマケドニア王フィリップの王子であるが、ここでは神々に見放されたエジプト王ネクタネブスがマケドニアに逃れ占い師として暮らし、フィリップ王の妃に秘法でアモン神と通じる夢を見させ、ついには自分も竜の姿となって王妃オリンピアスと通じアレクサンドロスを懐胎させたという話になっている。十二歳になったアレクサンドロスは星座観

察に自分を連れ出したネクタネブスを井戸に突き落として殺してしまふ。この出生に纏わる説話は十年前の旧著『中世の説話』に取り上げたので以上に留めておくが、ネクタネブスはアレクサンドロスの生まれる時間を星回りを見ながら調整したり、王子が世界制覇の旅から戻れば死ななければならなくなることを予言したりしている。アレクサンドロ大王の出生時の地震や雷鳴も片目が青、片目が黒目であったことも偽カリステーネーの伝えるところであり、こうした逸話は十四世紀の英詩人ガワアの『恋する男の告解』*Confessio Amanitis*（伊藤正義氏による邦訳がある。）の中にも伝承している。

アレクサンドロス大王の父フィリップが王妃が蛇と交わっているのを見たという伝承は、ブルタルコス『英雄列伝』でも語られている。ブルタルコスはアレクサンドロスとカエサルを並べているのであるが、これによってもアレクサンドロスがエジプト神アモンの子であるという伝承があつたことが知られる。フィリップ王が片目であつたことは他の逸話にも伝えられているがブルタルコスに依ると、これは王妃の寢室を覗こうとして片目をぶつけて失つたのだと言ふ。

偽カリステーネーによる伝記は四世紀にユリウス・ウァレリウスによってラテン語に訳された。この訳の要約が九世紀に作られて『エピトメー』の名で広く行われたが、これは単なる要約ではなくウァレリウスには無い『インドの驚異』についてアレクサンドロスが師アリストテレスに出したとされる手紙やアレクサンドロスと婆羅門王ディンディムスとの書簡なども含む形で流布した。ポル・メイエルは写本は百を越すと云っている。この『エピトメー』は十三世紀の百科辞典であるヴァンサン・ド・ボーヴェの『歴史の鑑』*Speculum historiale* にも収録されている。

中世フランス語で最も古くアレクサンドロス伝を残しているのは冒頭の百五行のみが残るアルベリック・ド・ピザン

ソンの断片であるが十二世紀初頭の作とされる。八音節で書かれ、六行ないし十行が同じ脚韻で書かれ *laisse* を作っている。この単韻で *l'es* を作って行く書法は後に一行十音節の改作でも、次いで十二音節になってもアレクサンドロス物語では踏襲されていくことになり、『物語』Roman といわれても寧ろ『武勲詩』に通ずる詩法となっている。

かつてはアルベリック・ド・ブザンソンと言われていたこの作家による百五行はフォーシュター・コシュヴィッツ共編の『古仏語読本』Foerster-Koschwitz: *Altfranzösisches Übungsbuch*, 1915 にもバルチュ編ウィーゼ改定『古仏語詩歌選』Bartch-Wiese: *Chrestomathie de l'ancien français* にもアベル編の『古プロヴァンサル語詩歌選』C. Appel: *Provenzalische Chrestomathie* にポル・メイエルが古文書学校用に作った選文集 *Recueil d'anciens textes bas-latins, provençaux et français*, 1874 にも全文含まれているので簡単に参照できるが、文学作品としてより語史資料的に扱われがちで親しまれていないのは残念である。

このテキストはフィレンツェのロレンツォ図書館所蔵のキントゥス・クルティウス・ルーフスの『マケドニアの大アレクサンドロス史』*Historiarum Alexandri Magni Macedoniae* の十世紀ないし十一世紀のラテン語写本の明いいた巻末の二ページに十二世紀と判定される筆跡で書かれていたもので、一八五二年（或いは翌年）詩人パウル・ハイゼによって発見され一八五六年に雑誌ゲルマニアにハイゼ自身によって公表刊行された。翌年アドルフ・トブラーが訂正版を出し広く知られることになった。

この作品は冒頭しか残っていないがこれのランプレヒトによる独訳によって大体の姿が推定されている。アルベリックという名もランプレヒトが挙げたことによって知られたのだが、テキストの示す方言的特徴によってブザンソンではなくドーフィネ地方のブリアンソンか又はピザンソンの方が適当であるというのが定説となつて今では一般に作者名を

アルベリック・ド・ビザンソンとする。このテキストはウアレリウスないしエピトメーによつたとされるがアレクサンドロスをフィリップの息子として第四節で『王が魔法使いの子であつたと云う詩人がいるが彼ら邪悪な中傷屋は嘘をついている。彼らの言うことを信じたら間違いだ。何故ならそれどころか王は帝王の血筋でマケドニア王の子なのだか』*Dicunt aliquant estrobodour Quel reys fud filz d'encantatour: Mentent felon losengatour; Mal credeyrez nec un de lour, Qu'anz fud de ling d'emperatour Et filz al rey Macedonor.* と偽カリストナーの伝承を否定している。キントゥス・クルチウスの写本に書かれているのも故なしとしない。しかし容貌については縮れ毛、片目が青(竜のふとく) v. 62. *L'un uyl ab glauc con de dracon, mou' une hie (鷹のふとく) Et l'autre neyr cun de falcon* と偽カリストナーに依つてゐる。

これに続いてアルベリックの作品を一行十音綴りに改作した作品が書かれ十三世紀には一行十二音綴の二万行の大作が作り上げられて行つたのである。ポル・メイエルが四つの部分を見分けて以来、これが定説となり、もつとも主要な第三部の作者はランベール・ド・ツール、アレクサンドロスの毒殺と葬式を扱う第四部の作者をアレクサンドル・ド・ベルニ・ド・パリと『狐物語』の最も古い枝編である第二枝編の作者でもあるピエール・ド・サンクルーと考えられている。アレクサンドル・ド・ベルネ・ド・パリがピエール・ド・サンクルーの書いた部分を取り込み十音綴であつた第一部をアレクサンドランにし全体の統一を図つたと言うのがファヤール社刊の『フランス文学辞典』*Dictionnaire des Lettres Françaises* の中世編に『アレクサンドロス物語』の項を執筆したフリュトル F. L. Flutre の見解である。

十三世紀の『アレクサンドロス物語』がその中に含む『天国旅行』、また幾つかの写本が第三部中に十四世紀のジャンク・ド・ロンギュイオン作の『孔雀の望み』*Voeux de Paon* またジャン・クルール(ブリズバール)によるその

続編『孔雀の慰安』 *Restor du Paon* を含んでいること、毒殺された『アレクサンドロス』の仇討ち『*Vengement d'Alexandre*』を二千行近いアレクサンドランの作品に纏めたのが中世フランスに伝わった釈迦伝である『バラムとジョザファ物語』も書いたギ・ド・カンブレエであること、四万千行の十四世紀の大作『狐に化けて』 *Renart le Conrefait* の語るアレクサンドロス大帝伝のこと又、十三世紀の前に触れた『戦史』 *Historia Proelium* が散文に訳され、十五世紀には散文で『ジラルド・ド・ルシヨン』を表したジャン・ヴォークランが『散文アレクサンドロス大帝物語』も書いていることなど、この物語は手に余る実に多くの問題を含んでいるが海中旅行の問題に戻ろう。

まずアルベリック・ド・ピザンソンは冒頭しか無いので此処では論じられない。十音綴の『アレクサンドロス物語』には二系統ありそれぞれパリ・アルスナル図書館写本、ヴェネティア図書館写本が代表するが、どちらにも海中旅行の項は無い。問題はアレクサンドル・ド・ベルネの十二音綴のものである。十二音綴の中世フランス語の『アレクサンドロス物語』を初めて刊行したのはアンリ・ミシュランでありシュトゥットガルト文芸協会叢書の第十三巻として一八四五年に出版した。ミシュランはパリ国立図書館フランス語写本七八六番を転写し、同じく三七五番写本の異文を所々脚注に挙げている。ポール・メイエルは『フランス文学におけるアレクサンドロス大帝』二巻 *Paul Meyer: Alexandre le Grand dans la littérature française*, T. I, 1870, T. II, 1886 の第一巻に同じ十二音綴のアレクサンドル・ド・ベルネの作品をバリ国立図書館フランス語写本七八九番から校訂しているが、双方に相違があるのである。エドワード・アームストロングは中世フランス語による『アレクサンドロス物語』の全てを校訂しようとエリオット・モノグラムに七巻の校訂本を刊行しているが、その第三巻は底写本が各部によって異なっているらしく写本の問題を扱っている第七巻が手許に無いため詳細が不明であるが、ポール・メイエル版とは違う読みが各所に見られる。不充分であるが手許の三

通りの『海中旅行』を紹介しておこう。

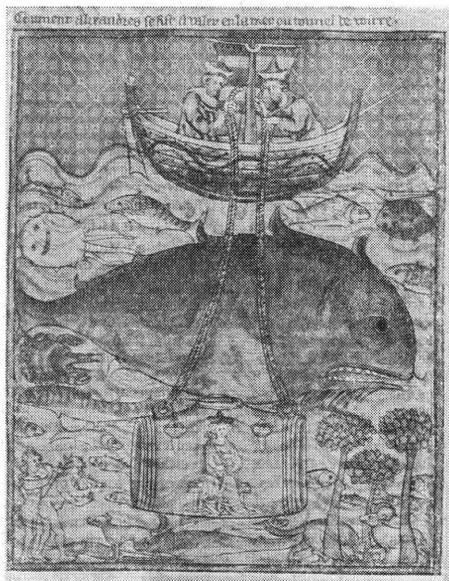
パリ国立図書館フランス語写本七八六 Paris, B. N. f. f. 786 によるミシュラン版ではタイトルを征服し、ダリウスにも勝ったアレクサンドロスに

『地上は充分征服したので海の実体を知りたいと言ってガラス職人にガラスの樽を作らようと云う。臣下は王が狂ったかと思うがアレクサンドロスはたゞぶりと報奨をあたえるからといってガラス職人に三人入れるガラス樽を注文する。きつと出来ませぬ、出来なかつたら首を差し上げませぬと親方たちは取り掛かり、かつて人が見た事もないような透明なガラス *voire blanc* の樽を作り、中には恍々と照るランプも備えたのでどんな小さな魚でも海中で見えないことは無いであろう。二人の若者を連れてアレクサンドロスが入ると外から城の様に嚴重に封じられた。『船乗りが自分たちの船にそれを乗せて海に運び、前面に輪を溶接し岩にも石にも当たらぬ様に鎖で海の底に降ろしたが鎖の鍵は金であった。(Li notonnier l'emportent en mer à lors batiel, Que il ne puist hurtter à roce n'a carrel. Ens el front de devant ot fondu. i. aniel; Iluec tint la caine dont d'or sunt li claviel.)』

節の脚韻がésに変わって『樽は一雙の船で水上に運ばれ四方から鉛でしっかり封じられた。アレクサンドロス王は中に入って船乗りには沖に運ばれると海の中に降ろせと命じた。樽が海中に降ろされるとランプは大変明るかった。樹は魚たちにじろじろ眺められたが樽が明るいので驚かない程大胆な魚は居なかった。』アレクサンドロス王は魚を良く観察して大きい魚も小さな魚も交ざっているのを見た。小さい魚は捕まると即座に貪り食われて仕舞うのであった。アレクサンドロス王はこれを見て全てこの世はけんので罰を受けているのだと考えた。(Alixandres li rois les a bien avisés, Et vit les grans pissons et les petis mellés; Quant li petis est pris s'empres est dévorés. Quant ce



ブリュッセル写本 11040 番



14世紀ベルリン写本

voir Alexandres, sempres est porpensés que tous li siecles est pérís et dampnés.)アレクサンドロス王は少しも恐れたりしなかつた。全ての魚を眺め見分けたがガラスの樽の方に顔を向けたりする程、勇敢な魚は居なかつた。(Alexandres li rois ne fut mie esbahis: Bien a tous les poissons et veus et coisis. Mais ainc n'en est .i. ki fust si hardis, Vers le tonniel de voirre osast torner son vis.) こうして魚を観察して弱肉強食の有り様を見たアレクサンドロス王は内心喜びもうギリシヤ人に騙されたり苦しきなれたりはしないぞ、大魚は良く身を守っている。他人から身を守る者が生き残るのだ。(Qui bien se puet defendre des autres est garris)と悟る。』

こうした観察の場面が武勲詩の様に節毎に少しづつ変わりながら繰り返され、アレクサンドロスは鎖で合図し引き上げられる。

アームストロングの刊行したテキストも細部を除けば大体同じ筋であるが、(The Medieval French Roman d'Alexandre, Vol. II Version of Alexandre de Paris. Elliott Monographs 37, Princeton U. P. 1937) ボル・メイエルが底本とした写本七八九(B. N. f. f. 789)では海中旅行はアレクサンドロスの少年時代のこととされ、海中にいる間に嵐が起こり、船は沈み樽を支えていた鎖も切れてしまうという事故が起きるのである。

三日絶食させた二羽のグリフォンを籠に付けて、見えなくなるほどの高空まで揚がる冒険をしたアレクサンドロス王は、今度はもっと大胆な海中旅行を試み様とガラスの乗り物(ここでは樽 tonniel ではなく容器 Vaisseau になっている)を作らせ親指の巾の鉄のたがを二本、ガラスに指二本の巾より近付かないように回りをめぐらせる。深い海に降ろされた時、岩が割ったり彷徨い歩いたりしないためである。Tant soutiument l'ot fait de fer loier entor Qu'il n'atouche au vaisseau de près de demi dor De deus bendes le caint, de plain doi le gregnor, Que roche n'en depiet, n'il n'en soit en errour, Quant sera mis en mer en le grant parfondor.) 『高きはフニート巾は四フイートより広く無い。入り口もすっかり合って水も漏らず、二年沈めておいても一滴も中に水が入るような事は無い。この容器にパン、葡萄酒、肉とハープをいれタオルと板とおんどりを一羽入れさせた。私も他の人がするのを見たら気違い業だと言っただろうがアレクサンドロスがこうしたのは大変良い準備で、今にその価値が分かる。』  
も彼は力と精力でインドを上部まで征服しようというのだし全世界で主として遇されたのだから。』

容器に入ったアレクサンドロスは海中に降ろして貰うために百トワズの長さのある鉄の鎖を鍛えさせ、鎖の先には巾

も奥行きも五フィートの箱を付けさせた。船が沈んでも場合でも箱が浮いている様に、海中にあまり長く居すぎた時、先生が見付け易くするための用心である。臣下や家族に計画を悟られまいと『この町に長く居すぎましたね。町の外に出て外国の船や鉄を打った船 *dimons ferre* が持ってきた色々な商品を見に行きましょう』と船長を誘って港に行つたアレクサンドロスは船乗りに頼んで船に乗り込み、ガラス器に入り、夜になったら上げて貰うことにして海に入るのだが、その間に嵐が来て船の方が沈んでしまう。皆溺れてしまふが船長だけが樽につかまって辛うじて岸にたどりつく。アレクサンドロスの方も海が荒れているのは感じられるので良い気持ちではない。船が沈んだのは知らないが置き去りにされたのは分かる。一昼夜戻つて来ないので先生たち（ブトレマイオス、アリストテレス、ナミエのサリオスなど七人の師がいるのである。）が騒ぎ出し捜すが見付からないので両手を合わせて捻じったり、髭をかきむしったり衣服を破いたりして悲しむ。アレクサンドロスは海中で強い魚が弱いのを食べたり、闘いを避けて岩の後ろに隠れたりするのを観察していた。帰れなくなるといふ恐れで絶望したくなるが、海は血を嫌うと聞いたのを思い出しナイフで雄鶏の首を刎ねるとたちどころにガラス器は浮かび上がったが波がすぐにもその場から容器を流し始め浮きの箱が牽き始める。一方、船乗りの方は樽に掴まって港の海上に浮かんでいるのを魚なら子供の腹の足しになろうと考えた年取った漁師が近付いて来て、人間だと分かり助けられる。漁師が身の上を聞くと富裕なギリシャの商人で十四人の配下と船に乗っていたがフィリップ王の息子アレクサンドロスを連れて、海の底の魚の所に降ろしたので、出来ればちゃんと引き上げられたのだが、嵐で船も財産も臈も失ってしまった、自分の配下も皆死にアレクサンドロスも溺れて見つからないだろうと話すので漁師はこれから助けに行かなくてはと言うのだがギリシャ人は腹が減って動けないというので、パンを取り出して食べさせ、二人で漕ぎ出して船が昨日居た場所を捜すが鎖の一方についていたはずの浮きの箱も見えない。

探し回ると岩の側で回っているガラス器が目に入り、何か泳いでるが魚だろうかなどと話していると、話声に気づいたアレクサンドロスが『溺れさせる気か。助けて呉れたら百マルクやる』と声を掛けた。二人は大喜びでアレクサンドロスを船に移し聖ダニエル港に着いたがアレクサンドロスは昼間町に入ることも城に戻ることも出来ないで助けてくれた老漁夫の家に行き、父フィリップ王がアレクサンドロスが生まれたアリエの町に居ると聞き、船でそこにいくことにする。ここではアレクサンドロスの七人の師が翌日裁判を受けることになっている。この裁判ではフィリップ王の家臣の一人アマテイドは悪いのはアレクサンドロスだと七人の師を弁護し、家臣スメランはすぐに処刑を主張する。プトレマイオスはスメランがダリウスと通じていたことを明かし反逆罪だと告発し言い合いとなる所にアレクサンドロスが帰還した吉報が届く。フィリップ王は七人の師たちの監督不行き届きを許す気にならずにいるが一同の願いで七人の罪を許すという運びになる。

ここでは海底の光景よりも力点はアレクサンドロスの冒険と思わぬ事態の発生と、中世人の興味を中心の一つであった『裁判』に置かれている様に思われる。『アレクサンドロス大帝物語』には特にインド遠征で出て来る奇妙な人間たち、巨人、一つ目、一本の広い足を持ち、それを日除けにして寝る人、頭が無く腹に目が付いている人、あるいは春土から生えてくる乙女の森、若返りの泉、不死の泉、或いは水辺にいて人を引きずり込み食べる河馬など意表を突く物が次々と出現し、アレクサンドル大帝の毒殺の場面など緊張感を与える纏まった部分もあるが、アレクサンドル・ド・ベルネの努力にも拘らず、作品を貫く一貫性が感じられないのが、近代になって疎んじられる原因であろう。戦後に武勲詩の発生について激しく論争されたメネンデス・ビダルの新伝統主義とベディエの個人的詩人による個人発生主義を調停しようとして一九六一年にハイデルベルクでコロキアムが開かれたおりピエール・ルジャンティ教授が『中世の文学創造

についての考察』 *Reflexions sur la création littéraire au Moyen Age* と題して、触媒的に題材から文学を創造する詩人を突然変異を起こさせる因子にたとえて、『アレクサンドロス大帝物語』を公衆とジョン・グルールの共同作業でありながら触媒としての作家を得られなかった作品として次の様に述べているのを思い起こす。ルジャンティ氏はギリシャ・ローマの古典にもとづく作品について次のように云っている。『最も古い『アレクサンドル』は十二世紀中次々と改作の対象となった。アルベリック・ド・ピザンソン、ランベール・ド・トール、アレクサンドル・ド・ベルニなどかなりの数の改作者や翻案者が関わったその複雑な歴史をここで再び検討する必要はまったくないが、この次々の持ち寄りから一つのウルガータが生まれたことを考えるだけで充分だろう。また、古代小説の三部作と言われるものの中でたったひとつ『トロイ物語』だけにしかゾノワ・ド・サン・ト・モールという著者のサインがないことも注意して置こう。ここに武勳詩を思い起こさせる発展、変奏、作者名無し<sup>1</sup>の現象と練り上げの過程がある』 *Chanson de Geste und hñfischer Roman*, heidelberg Kolloquium, 30. Januar 1961. (Carl Winter, 1963) “Les premiers textes connus s’inspirent de la matière de Rome, c’est-à-dire de sources classiques. Le plus ancien, *l’Alexandre*, a été l’objet de plusieurs rédactions successives, dans le cours du XII<sup>e</sup> siècle. Point n’est besoin ici de retracer cette histoire compliquée, qui met en cause un certain nombre d’adaptateurs et de remanieurs, Alberic de Pisançon, Lambert le Tort, Alexandre de Bernai par exemple. Il suffit de rappeler cet accroissement progressif, qui a abouti à la rédaction d’une *vulgate*. Notons par ailleurs que, seul de la Triade dite classique, le *Roman de Troie* est signé, par Benoit de Sainte-Maure. Voilà des développements, des variations, des phénomènes d’anonymat et des processus d’élaboration qui rappellent la *chanson de geste*.” <sup>1</sup>トントト

の云う三要素、材料 *matiere* 方向付け（意味）*sens* と組み合わせ *Conjuncture* を自覚している作家の問題に注目していたことが思い起こされる。アレクサンドロスの海中旅行も材料として出されながら生かされずに終わったテーマの一つと思われる。